

聖火リレーアンバサダーレポート

「東京2020聖火リレー特別授業」を宮城県石巻市の中学校で実施 生徒たちが歴史や意義を学ぶ

2019年7月5日



ークセッションなどで中学2年生の生徒たちと交流を深めました。



クイズ大会を楽しむ生徒たち



トーチを持った4名の反応は!?

第1部で行われたクイズ大会では、最後まで勝ち残った生徒がトーチを持つことができるとあって、みな気合十分。最初の2問は多くの生徒が正解しましたが、「東京2020オリンピック聖火が日本に到着する場所はどこでしょう? (答えは宮城県 航空自衛隊松島基地)」という3問目に関しては、選択肢に「千葉県 成田空港」が入っただけに、半分以上の生徒が不正解となりました。結果、次の4問目「東京2020オリンピック聖火リレーは何日間行われるのでしょうか? (答えは121日間)」が最後の問題に。トーチを実際に持つ権利を得た4名の生徒たちの反応はさまざまでした。「思ったより重かった」「意外と軽かった」「桜の模様がきれいだった」と、人によって抱く印象は異なっていました。



トーチを手にして、楽しそうに話し合う生徒たち



特別授業では生徒たちによる発表も行われました

聖火リレー教師用指導案及び授業用参考資料を活用した第2部の特別授業では、渡波中学校の教諭から「聖火リレーのランナーにはどのような人がふさわしいか」という課題が与えられ、生徒たちはグループワークに取り組みました。そこで生徒たちが出した答えは「熱心で最後までやり遂げられる心の優しい人」「常識があり、あきらめない、公平な人」など。各自が真剣に考え、それぞれが自らの理想とする人物像を頭の中に描いていたようです。これにはグループワークを見て回っていた田口さんと千葉さんも感心した様子。お二人とも「そういう人が聖火ランナーになってくれたらすごくうれしい」と笑顔を見せていました。



東京2020聖火リレー公式アンバサダーの田口亜希さん



オリンピックの千葉真子さん

また田口さんと千葉さんは、自身の体験を通じて、生徒たちにメッセージを送りました。射撃のパラアスリートとして、2004年アテネ、2008年北京、2012年ロンドンと3度のパラリンピックに出場した田口さんは「25歳で病気になり車いす生活を余儀なくされた私ですが、友人のおかげで射撃に会い、パラリンピックに3度も出ることができました。（生徒たちと同じ）中学2年生のときは、私も夢や目標はなかったんです。今は大きな目標がない人でも、学校の授業をしっかり受けたり、家族や先生の言うことをしっかり聞いて、目の前のことを頑張っていれば、いつか何かを成し遂げられる。オリンピックやパラリンピックはそうした目標や夢を持つきっかけとなるものです」と思いを語りました。

千葉さんもそれに追随します。

「中学2年生のときは私も自分が嫌いでした。コンプレックスもあったし、自信が持てなかった。ただ、駅伝に誘われ、走るようになったら人生が大きく変わったんです。ちょっとしたきっかけで人は変わる。さっき皆さんに聞いたら「聖火ランナーになる自信がない」と言う人もいました。将来何か成し遂げたいと思っている人がいれば、積極的に参加して、この聖火リレーを自分の成長につながるきっかけとしてほしいと思っています」



今回の特別授業を受けて、渡波中学校の鎌田優輝さんは「オリンピックやパラリンピックには元から興味はありましたが、聖火リレーについてはあまり知りませんでした。これからは興味を持って見ることができるとし、僕も参加してみたいと思いました」と意欲を示していました。同じく中里桜花さんは、東日本大震災後に作られた仮設住宅の廃材がトーチに使われていることについて「私も以前、仮設住宅に住んでいたため、いろいろなところから廃材が集められ、この1本のトーチにこれまでの復興が表れているんだなと感じました」と話していました。

聖火ランナーの応募資格は2008年4月1日以前に生まれた方。渡波中学校の生徒たちにとって、この授業が聖火リレーや東京2020大会の興味・関心を深めるとともに、未来の成長につながる1つのきっかけとなれば幸いです。

- [組織委員会について](#)
- [お問い合わせ](#)
- [ウェブアクセシビリティについて](#)
- [リンク](#)
- [利用規約](#)
- [個人情報保護方針](#)
- [クッキーポリシー](#)
- [サイトご利用にあたって](#)
- [サイトマップ](#)
- [報道関係者の方へ](#)